



素人の反省

触媒研究所教授 宮原孝四郎

図書館委員になって一年半、何となく委員会に参加してきたが、この欄に何か書くようにと云われて、さて殆んど知識がないことに気がついた。ある人の分類によると研究者の型もしくは研究分野には比較的狭い領域の資料で事足りる“尖端型もしくは孤立型”と、広い領域の検索を必要とする“開発型もしくは独創型”とがあるそうだ。触媒作用の物理化学的基礎づけを主流とする私達はこの前者に属するらしく、科学史や工学的関連を除けば、殆んどが研究所図書室で事足り、あまり図書館を利用することがない。また手許になくは困る資料ばかりで、従って強いて乏しい研究費から図書費をひねり出しているわけだ。

さて図書館委員会では規則改正や予算案の審議はあっても、未だ大学図書館の現状、その運営方針など大綱についての資料や討論はなかったので、改めて学術月報その他を調べてみた。以下はこの段階で出てきた図書館の素人の反省というわけである。

最近ドキュメンテーションという言葉をよく聞く。一口に云えば“文献資料の収集と情報の検索更には生産”で、音頭よりは科学技術情報センター（昭和32年設立）と文部省大学学術局情報図書館課（昭和40年設立）で、国立国会図書館がそのモデル図書館に当てられているらしい。最近、時にお目にかかる限られた分野の雑誌のコンテンツ・サービスや、電子計算機導入計画などはこの線から出ている。その狙いは当然応電山崎教授も述べられている様な管理方式であろうが、それを大学の図書館に当てはめようとするときの当面の問題はむしろ教授が触れられなかったそこへ到る道程にありそうだ。健全な合理化を進めるには、先ずその基礎作りに十分な金と人をつぎこむことが不可欠であろう。1961年に始った国立国会図書館の資料整備3カ年計画につき込んだ金が年間1億3千万円以上、人員が科学技術関係業務だけで50名であったのに比べて、資料の蓄積と整理に追われている北大図書館員の約半数が臨時雇であることだけを見ても、大学図書館の立ちおくれはあまりにもひどすぎる。おくれればせながら教養図書分館が出来るそうだが、それもわずかな図書と閲覧室の提供のみで終っては、マスプロ教育の欠陥を少しも埋めてはくれないだろう。又資料の整備を進めてゆくにつれ旧態依然たる現状の学部分立が大きな障害になることも予測される。学術会議でも昭和40年に「大学図書館の近代化と学術情報組織の確立」を勧告しているが、政府は未だに実態調査を細々と続けている状態らしく由々しい事である。

◆ 会 議

第34回 図書館委員会

く と き 昭和43年10月23日(水)>

く と ころ 附属図書館会議室>

協 議 題

1. 科学研究費の用途について
2. 露語雑誌翻訳版の購入について
昭和43年度科学研究費の用途について審議を求め、本館の考えを次のように説明した。
(1) I.B.Z. の欠号分を補充したいこと。
(2) 現在、本館で購入している Chemical Abstracts の購入をやめ、この予算と共通図書費で Science Citation Index を購入したいこと。
(3) (1)と(2)の残額で露語雑誌翻訳版を購入したいこと。
以上について審議を行なった結果、(1)については、全員異議なく了承されたが、(2)、(3)については継続審議となった。

報 告 事 項

1. 国立七大学図書館協議会について
館長から標記会議が開催されたこと、主な協議事項は図書館の機械化の問題であった旨報告があった。
2. 日米大学図書館会議について
館長から準備委員会の経過報告と開催要綱が承認された旨報告があった。
3. 道地区大学図書館協議会の開催について
館長から標記会議が開催されたこと、主な協議事項は、道地区大学図書館総合目録の問題で、今後調査委員会を設けて検討を続けることになった旨報告があった。
4. 昭和43年度国立学校図書専門職員採用(上級、中級)試験の実施について
部長から標記試験の実施報告があった。

附属図書館機械化検討小委員会

第1回小委員会——10月15日——

前号にてお知らせ致しました標記小委員会の第1回小委員会が去る10月15日、附属図書館に於て開かれました。会議には、司馬、長田両委員から、電子計算機について専門的な立場からの説明があり、続いて小委員会の目的、検討方針、小委員会の持ち方等につき話し合いが行なわれた結果次の様な申し合わせを行なった。
①小委員会としての一応の結論を来年4月末日迄に出す。
②機械化のための検討対象内容と、その範囲については、今後の検討によって決めることとする。
③小委員会は当面、情報・収集・各機関の見学等を中心に、毎週月曜日に開くこととする。

第2回小委員会——10月18日——

北海道拓殖銀行事務センターに於て I.B.M. 360-751 型、同 7070 型、同 1401 型を見学、同センター岡本次長から計算機導入を考えるにあたり検討すべき事柄などについてご懇切なるご教示を受けた。

第3回小委員会——10月28日——

日本 I.B.M. 株式会社東日本営業所札幌営業所に於て、I.B.M. 360 Model 20 を見学、同所千葉氏から図書館業務のフローチャートをもとに Model 20 の使用方法について説明を受けた。

第4回小委員会——11月12日——

北海道ビジネス・オートメーションに於て NEAC、シリーズ 2200、Model 200 と、同 400 を見学、同所栗田氏から電子計算機を利用した実務処理を水道料金計算、給与計算等と諸経費について説明を受けた。

教養分館建築計画委員会について

教養分館の問題については、これ迄も当館報にて逐次状況を報告してきたところですが、昭和44年度概算要求の見通しが明るいことに伴い、教養分館建築の問題を早急に取上げることとなった。このような状況のもとに附属図書館では教養部との事務連絡をより緊密にするため、標記委員会を設けることとした。委員会は教養部側から施設計画委員長、図書委員、事務長、関係者、又附属図書館側から館長、部課長、関係者にて構成した。

第1回委員会10月29日(火)、教養部案と、施設部案をもとに検討を行なった結果①分館の建物は、施設部案のように3階建とする。②将来増築出来る方向にて進める。③建物は出来れば東西に長くする等を確認し、次回から施設部関係者の出席をお願いすることとした。

第2回委員会11月5日(火)、施設部側、部長、企画、建築両課長の出席を得て開かれた。館長から第1回委員会の経過報告があり、施設部長から、分館の位置・概形等これ迄の概要につき説明があり検討を行なった結果、建物の位置については分館と現教養部の建物との間隔を90mとすること、建物内部の室割り等については、委員会の意向をもった案を施設部が作成し次回の委員会に提出することとした。

第3回委員会11月9日(土)、施設部側、部長、企画、設備、建築各課長関係各係長出席のもとに開かれ、前回の方針のもとに作成された案につき検討した結果、建物の形は南北に長く、玄関は東向ということを確認し、案を了承した。

以上3回の委員会をもって、教養分館の概要を確認したことにより、委員会の事務的連絡の仕事は終ることとなった。

第18回 北海道地区大学図書館協議会

<と き 昭和43年10月21日(月)>

<ところ 藤女子大学>

協議会は、当番校牧野学長の挨拶により始められ、同校奥山館長が議長に選出され議事が進められた。午前は第17回協議会、議題中報告事項とされたものについて、各々関係大学から報告があり、引続き、国、公、私立大学より道内外の図書館界の動向につき説明があった。

午後は協議会の審議に入り主なものは次のとおりである。①北日本学院大学と札幌商科大学が新しく加盟を認められた。②協議会が発行する“北海道の大学図書館”の編集要項、様式等については、昨年度と本年度の当番校において協議作成することとした。③北海道地区総合目録の件については、相互協力という観点から、委員会を設け、審議をそちらへ移し委員会は協議会役員館で構成することとした。

尚次回開催の決定は後日へ持越された。

◆ 学内図書館たより

<附属図書館>

故宮部金吾博士の旧蔵書を受贈

宮部金吾博士は内村鑑三、新渡戸稲造氏らとともに第2期生として札幌農学校に学ばれ、以後札幌農学校、北海道大学教授としてその全生涯を本学とともに歩まれた。博士はわが国における植物学の創始者ともいわれる方で、昭和21年には文化勲章を受賞された。昭和26年博士の逝去後ご遺族のご好意により、博士の蔵書の大部分は農学部へ寄贈され、「宮部文庫」として整理、保管され同学部の貴重な財産となっている。

このたび附属図書館では博士のご生前に附属図書館が寄託を受けていた図書約250点および宮部記念会館(もとの博士のお住いで現在は本学の宿泊施設となっている)に遺されていた博士旧蔵の図書、雑誌、ノート類についてご遺族宮部一郎氏(家の光協会会長)に寄贈をお願いし、こころよくご同意をえた。これらの資料は農学部の「宮部文庫」に合体することが望ましいので同学部へ移管したが、現在では入手困難な資料が数多く含まれており、広く学内外の研究者の利用が期待される。

複写室に自動現像機導入

この度附属図書館複写室に長い間の願望であった、マイクロフィルム自動現像機を導入した。選定機種はフジミニコピーオートプロセサー2型で、これは1型につづいて発売されたものであるが、国内では七番目、道内では第一号機である。同様の機種は米国コダック社でも製販されているが、価格は国産の約2倍位も高額である。自動現像機の導入により、今迄の手現像による労力と時間が軽減され、でき上りフィルム濃度の不定が一挙に解決された。

従来4~6時間位も要していたものが、自動現像機では40~50分位で現像、定着、水洗、乾燥迄のすべて、しかもいっさいの人手をわずらわすことなく機械が処理してくれる。

さらに自動現像機の処理機構が全てオートマチックであるため、液温及び時間に神経をとがらせる必要もなくフィルムは常に均一な濃度に仕上り、マイクロ複写が一段と迅速かつ鮮明に仕上るようになった。最近着手した新聞のマイクロ化業務にも大きな威力を発揮している。

附属図書館所蔵新聞のマイクロ化に着手

附属図書館は明治末年から新聞の保存に努めてきたため、現在ではこれら新聞の蓄積は相当な量にのぼっている。これらの中には附属図書館にしか所蔵されていないものがいくつかあり、古い新聞を調べるために附属図書館を訪れる人々も少なくない。しかし長年にわたり保存がよくなかったためもあって、古い新聞の破損は甚だしく、このままでは貴重な資料が消滅してしまうことが憂慮されている。附属図書館ではすでに「新聞所蔵目録」を作成し、従来の複製本に代えて古い新聞から順次永久製本に切替えつつあるが、一方新聞のマイクロ化も永年の懸案であった。

幸い、複写室では最近複写の種類が漸次マイクロからゼロックスへ移行する傾向が著しくなり、マイクロ関係の業務に余裕がでてきたため、漸く文献複写業務の合間を利用して新聞のマイクロ化に着手することが可能になった。最初に着手したのは「北海タイムス」(明治24~昭和17年10月)である。この新聞は昭和17年11月に道内11の日刊紙が合併して「北海道新聞」ができるまで、いわば北海道の中央紙であったもので、附属図書館は先年北海道新聞社の好意により補充を受けて明治37年10月から昭和17年10月の分を所蔵している(欠あり)。計画ではこれに次いで「樺太日日新聞」(所蔵:明治43~昭和16)、「室蘭毎日新聞」(所蔵:大正11~昭和15)、「小樽新聞」(所蔵:明治41~昭和17)、「函館毎日新聞」(所蔵:大正3~昭和12)、「北海道帝国大学新聞」(所蔵:大正15~昭和20)などが予定されているが、新聞のマイクロ化には多くの経費がかかり、またなるべく完全な新聞の揃いが望ましいので、他の図書館の協力が期待される。なお「北海道新聞」については、北海道新聞社の協力により、すでに昭和17年11月から昭和28年までの分をマイクロ化し、ネガ及びポジを所蔵している。

空気調和(換気)装置の設置について

附属図書館では、さきに関覧室等の空気の湿度換気等の状況について調査をしたところ、環境条件が非常に悪く衛生上支障をきたしているため、この度標記装置の予算化を計り、この11月20日に竣工しました。

この装置によって、閲覧室等の環境条件は非常によくなりました。

又これまで3階一般閲覧室の閲覧席数212席のうち60席が照明設備がないため不便をかけておりましたが、この度この席にも照明設備を備え付けましたので、上記と併せ、快適な閲覧が行なわれることとなります。

< 文 学 部 >

北海道大学文学部所蔵 「創刊号特集」

冊 子 目 録 B 5 版 72 頁 謄写刷 1968 年 11 月 刊

文学部には雑誌の創刊号ばかりを集めた珍しいコレクションが所蔵されている。これはかつて札幌の古書肆尚古堂主人代田茂氏が蒐集されたもので、同店の廃業にあたり昭和25年文学部が譲り受けたものである。

蒐集雑誌は1,178点で総合雑誌、文芸雑誌を始めとしてあらゆる分野の雑誌を含み、「創刊号特集」として113冊に仮製本され、附属図書館書庫に収められている。

この目録は、「創刊号特集」に含まれている雑誌を誌名順に配列し、出版地、出版者、発行年月および製本番号を示したものである。創刊号は雑誌の発刊の意図をもっとも明確に示すものであり、この特集は出版史の研究にとって貴重なコレクションといえることができる。

なお附属図書館も松村栄次氏より寄贈を受けた「創刊号雑誌」(21冊に仮製本)を所蔵しており、この中には431種の創刊号を含んでいる。



北海道において、薬学の組織的な教育及び研究が行なわれるようになったのはごく最近のことで、昭和29年、北大医学部に薬学科が設置されたのが本道における初めての、そして現在も唯一の機関である。その後、昭和40年に薬学部となり、薬学科7講座、製薬化学科6講座、合わせて2学科13講座を容するまでになったのである。当時、校舎も北と南に2分され不便さをかこっていたが、この3月に新校舎の完成をみるに至って、ようやくその機能を十二分に発揮できるようになったのである。

当時の図書室は、広さ13坪程の非常に狭苦しいもので掛員と閲覧者とが雑居し、閲覧席数も4席しかなかった。その後、図書資料も増えて狭い図書室がさらに狭くなったため、閲覧者は廊下を仕切って作った閲覧室に追い出される始末であった。冬ともなれば、スチームのおおらない日々もあって、寒さに震えたこともあった。今、それらのことは語草となりつつあり、そのかわりに近代的な真新しい建物の中に、ささやかではあるが前に比して、はるかに良くなった図書室がある。広さも旧の3.5倍程になり、閲覧席数も5~6倍と数多くとれるようになった。

しかし、設計図の段階においては、将来薬学記念館を建設する計画があるために、特に図書室のスペースは考えなかったようである(薬学記念館は、大講堂と図書室からなる318坪程の建物である)。その後、仮住いながら現在のようになったのである。が、事務長はみずから事務長室を開放し、図書事務室に転用することを決められたのであった。これは、当事務長の大学における図書館の役割に対する深い理解があったからにはほかならないのであろう。このことは、図書業務にたずさわる者として、特に感謝している次第である。

薬学部図書室の特色としては、まず初めに非常に解放的であるということを上げることが出来るかもしれない。学生に対しても教官と同等に利用できるようにしているし、他部局の人々にも利用しやすいよう配慮している。閲覧方式は全面開架システムを採用している。又、時間外開館については次のような方法を取り入れて、365日いつでも午後9時までは利用できるようになっている。

時間外に図書室を使用することのできる資格は、本学部の教職員及び大学院学生(研究生も含む。)で、学部学生は原則としてこの時間の利用は認めない。但し、有資格者と同室の場

合に限り利用することを認める。手続として、本学部発行の身分証明書を宿日直者に提出し、図書室の鍵を受けとり利用簿に署名し、入館時間を記入の上利用する。使用後は、鍵を宿日直者に返還し、退館時間を記入の上、身分証明書を受けとることとする。この時間内に於いては、館外持出しを認めない。以上のような方法で、平日の午後5時から、土曜日の午後12時30分からと、日曜、祝祭日の午前9時から、いずれも午後9時まで図書室内において図書資料を利用することができるようになっている。最近、終夜開館を望む声が高くなってはいるが、色々問題があってそこまで踏切ることにはできない。

図書室の運営について種々のことが、教務委員会図書部会において討議される。この委員会は、各講座の教務委員と図書委員(1名)とによって構成され、予算案の立案、収書方針、購入図書、新規購入雑誌等の選定、バックナンバーの購入順位の決定等を行なう。委員会の決定に基づいて図書室では、図書資料の収集、整理を行ない利用者に供しているのである。学生用図書については、附属図書館に学生用教官指定図書があるが、地理的問題等利用しづらい点もあるため、年間20万円程を使い学生用図書の収集に全力を上げている。

近年、物価上昇の波は図書資料にも波及し、図書費は激増の傾向にある。なかでも、化学系の雑誌はその収録論文数の激増と共に増々、著しく値上りしてゆくものと思われる。とくに、Chemical Abstractsの値上りは著しく年間購読料は、45万円を越え、近々、一部局で購読することが出来なくなり、理科系学部で共同購入するようになるのではなからうか。

ともあれ施設も十二分に満足できるというわけではないが、前に比べるまでもなくはるかに良くなった。掛員も今春から1名増員されて3名となった。今後、われわれは薬学部の教官、学生を主とし、他部局の方々へもより良い図書館活動を行なうよう、鋭意努力するつもりである。

本学教官が出版した著作物 (単行本) 第4回

法 学 部

五十嵐清・田宮 裕 名誉とプライバシー (昭和43年)

五十嵐清・比較法入門 (昭和43年)

理 学 部

梶目清一郎・吉田仁志・他 総合化学実験法 (昭和41年)

湊 正雄・THE DEVELOPMENT OF THE JAPANESE ISLANDS

神原富民・訳 テラヘイ機器分析 (昭和34年)

神原富民・長谷部清・訳 新しいポラログラフ

イー (昭和41年)

田部浩三・他 酸塩基触媒 (昭和41年), 物理有機化学演習 (昭和42年)

中川鶴太郎 レオロジー (昭和34年), (昭和35年)

入江 遠・他 総合化学上巻, 下巻 (昭和38年)

工 学 部

森二三夫 産業心理学入門 (昭和43年)

黒部貞一 半導体回路 (昭和43年)

岸 力 水理学演習 (I), (昭和43年)

水 産 学 部

新川伝助 水産経済研究 (昭和43年)

前 号 の 訂 正

頁 行	誤	正
4 — 37	次とおりの	次のような

◆ 人物往来

新図書館委員

渡 会 彰 彦 (教養部助教授)

北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 Vol. 2, No. 6 (通巻12号)

1968年11月30日発行 発行人 齊 木 一 郎

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北8条西5丁目 電話代表 71-2111 (2966)

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市北3条東7丁目 電話 23-5560